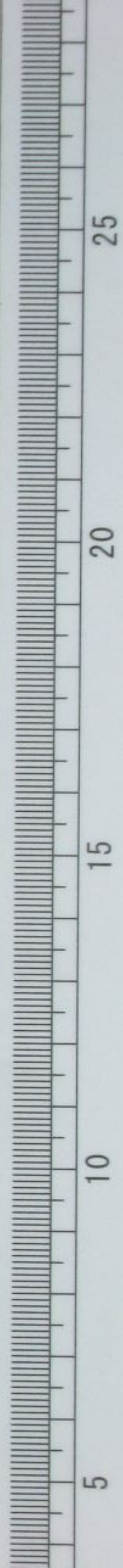




411
1713
4c



門
1773
4

續泉山景境詩歌集序



巻九 林きりまらる事あり視の海波うきき
 あまのしほの流るるし淡香山のけり又
 よりて限る事ありはあまの道のちりりし
 武蔵國崎玉郡河原の里照岩禰る笠岩老
 和者よ喝し侍る時予又かきけりし河原乃
 けりして八つ此景十條り二つの境の名と題し
 あまのしほのきとをわすけし山のこと
 系を集め又冬唐の歌よむ人々の詠吟と
 乞求め景境詩歌集と名つけて梓又ちりしめ

續泉山景境詩歌集

けは廣めに又こゝに或やんことある方れま
 りまきこひかきわを新くははるん言まき低とわ
 りあ束得しりよまきせたりや書の新と遠ひ加ん
 の心をもて二の巻とありとむりせん原されと
 大和もかすも甚き思とて思く探するよあむと
 便よ志よ縁又何ぞそ落事好おまに記一ぬ
 け事の手を世書乃初よ志やとてま行りし錢
 変くかひさしやゆらよ志あてまの十か一は乃こ
 りやちきに似るれと甚き需よ志こひぬ定け系
 有とよ老師の志よあ守ハんそ世よ知んやこの

書世よむろまふれとよわし泉山の後ぬ述を傳一
 利根川の流ての代了確ん事をよらふ僕何の
 幸まやけ書の記よあひこかこむしんこの事よ
 記しぬるをわらふらひの所を恥あしこひん見
 と短き毫とこか一そのまよめとぬさく事
 かぬり

坂竹曹光序之

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

續泉山景境詩歌集目錄

詩人

賴恭

松平讚岐守

昌成

真平大膳大夫

定賢

松平越中守

忠篤

本多兵部少輔

子紫

本多左京

子曉

本多靱負

蓬壺

南禪寺少林院

東溟

南禪寺雲門菴

東陵

建仁寺兩足院

右白

南都前知恩院

指月

龍淵寺

花睡

龍泉寺下

義夫

村上左忠次

伊尚

辻木工之進

貞幹

原瑤泉

越溪

山田宗順

巨山

片山弥二郎

黎丘

岩原永佐

鷺洲

村上平格

林英

福富興菴

霞洲

片山氏女阿國

西園

片岡金二郎

南山

伊藤三郎兵衛

中臺

小河原平兵衛

羽橋

村田羽七

西涯

伊藤安右衛門

歌人

吉村

松平陸奥守

昌成

奥平大膳太夫

賴濟

松平貞五郎

忠用

酒井一學

賴邦

一柳兵部少輔

直方

市橋壹岐守

民子

茂登子

高須少將源義孝女

滿佐子

守山侍從源賴貞女

基祐

畠山紀伊守

基房

大澤隼人

富純

新田岩松氏

直僖

一柳要人

信遍

成島道築

良胤

海上弥兵衛

種仲

鶴飼佐十郎

重賴

加藤三右衛門

定軌

奧平新左衛門

壽山

曹源寺

賢中

安樂寺

好山

泉福寺

白堂

瑠璃光寺

諄常

大聖院

雪眼

曹源寺下

元明

一乘院下

玄道

常明寺下

清玉

來迎院

親阿

快樂院

鶴洲

普廣寺下

重祐

鳥居六郎左衛門

光淳

坂將曹

松逕

牲川氏

友淳

高津因幡

良直

堀幸端

成長

間瀬平助

主稅

種芳

松村和助

意貞

田中左七

翫之

由惇

長谷川小藤太

隆封

堤清左衛門

兼明

正田彦右衛門

茂卿

篠木覺之丞

永守

小川六左衛門

宣方

松井茂市郎

常記

澤崎三右衛門

政則

石川八郎

義雄

為田主稅

盛和

原武大夫

時峯

永田傳三

宗阿

市野三右衛門

重直

市野市松

光業

河原勘解由

重直

江田源左衛門

儀珍

高澤四郎右衛門

重救

劍持臺右衛門

恒督

中村長三郎

方恒

荻野為伯

元貞

黒沢主水

少晨

忍桃樹

信高

上意益

美種

荒木平左衛門

實盈

長谷川伊左衛門

軌琛

高沢四郎次

重幸

河原太郎次

茂啓

江田源八

隆重

鈴木又左衛門

陳宜

横田彦右衛門

高雅

横田源右衛門

延秀

齊藤内蔵之助

忠房

齊藤金八

豊矯

吉岡宇右衛門

明雅

吉岡傳次

貞賢

長谷川仲次郎

道運

森徳右衛門

道品

森左吉

政命

長谷川内匠之介

常房

茂木藤七

政清

林兵庫

清平

實勝

高橋伊右衛門

忠於

高橋半四郎

光延

中川安兵衛

一鳳

宇留野玄順

悟心

森田氏

村瀨

箕田氏女

浦野

大久保氏女

園田

長岡氏女

吉岡

大林氏女

岸岡

岸氏女

利代

秦氏女

知政尼

恒屋氏女

梅

鳥井氏女

美代

杉田氏女

岩之

光淳女

松琴

美滿

房

三穗

繁

伊代

登良

伊和

遵精

自覺

市野氏女

長谷川氏女

吉田氏女

劔持氏女

同上

江田氏女

高沢氏女

岡田氏女

凉池庵

根岸氏

松花

根岸権九衛門

續泉山景境詩歌集

照岩現住竺巖輯

周察 同校
周圓

八景

日光晴嵐

賴恭

烟靄霏々望裡濃日邊雨罷彩雲重靈蹤依舊
晴嵐色綠樹遙開第一峰

同上

子曉

日光山上色雲雨去悠悠霽後晚風起踈鐘蕭
寺幽

吾も此處よりしてむと乃黒髪山此處に名取の松琴

此處より中尾の青たて黒髪山に雲もさしりし中 重直

後里の人の福もこれゆん嵐の後此處のこのころの 湊芳

築波夕照 忠篤

極望筑波色絶頂白雲端晚來掛落日更照掌

中看

同上 東溟

雙峰高秀夕陽明想見東方第一名猶有白雲

横_ニ半嶺望中還起故園情

筑波松夕照

いさかや杉をめぐりて夕日さする峰の峰 頼濟

夕光の流るる山の名を流るるののくに照る峰の峰 富純

秋の初めつこの峰をめぐりて夕日さする峰の峰 基房

を方此嶺をさす筑波山をこと夕日の山面して 博精

春の花秋をめぐりて山をめぐり夕日の新のこたけ 友淳

久々のあまきり雲の霞より夕日さする筑波松の峰 高雅

若くは海の方ちのりも高れ筑波の峰に夕日 宣方

寸分のまき夕日にさめるとはめに筑波をこぼれ浮くやを之 翫之

ゆくちのあまきり雲の夕附のあまきり筑波をこぼれ 羨満女

たぐひを此海の赤はく山と山と夕日とありて
光業

赤城暮雪 東陵

赤城花雨暮雲端積素遙成危堞看層嶽由来
多秀氣千尋雪色夜光寒

同上 伊尚

朱欄遠望朝雲晴天外群峯暮色生獨對赤城
山上雪夕陽落處更孤明

赤城暮雪

何處山花夕影の白雪乃ちかり影なりて
忠用

降つる花と見れば夕日影何處の山花をよめ
満佐子

降ぬる雪よ入るる雪を名をあききの風の風は
諄常

夕日影何處の白雪もあきの雪まつりか
元明

遠方の麓の里はこれめを成の雪に
軌琛

夕日影何處の白雪もあきの雪まつりか
豊矯

何處山名とあき影の夕日影何處の雪
三保女

夕鳥影何處の白雪もあきの雪まつりか
重祐

雪の影何處の白雪もあきの雪まつりか
清平

山くハみれ秀ハくれをひる雲にけさの顔の跡は 種伸

泉山秋月

頼恭

突兀^ル泉山夜色晴碧夫如水露華清流光偏映
松間月萬里秋風聽鶴鳴

同上

義夫

月滿泉山古梵宮空林香動桂花風夜深玉殿
涼如水人在秋雲縹緲中

泉山秋月

名も高泉の山乃りきて秋の夜をく月を望ん 昌成

秋の夜乃月いつこの山に名に竹光を秋をさやけき 忠用

秋きよきりきていつこの山は塔よほしのあつる月の痛^{がき} 直信

歳秋もあつるはきりきて秋いつこの山は月ゆるき 民子

市は是照るりとせきていつこの山は月よほき枯徳よ月 信遍

月も秋の夜をいつこの山は月よほき秋の顔のゆかり 重頼

名も高きいつこの山に秋のまじ月の光をよけいつこの山 定軌

秋深き泉の山に山水は光をよけいつこの山は月よほき 永守

ころ月は新も木のまじりて山に照る今宵の竹まき
 友淳
 羨妙のゆぬ詠のしんじつにやけき月のひらり
 常記
 忠子のぼろ雲の巻終て月に青すむ秋乃山
 宗阿
 名にふる泉の山北代にけさうぬ秋月やまゆ
 壽山
 新を初月終る泉の名にふる山を秋の月と言ふ
 雪眼
 泉山より此月の新を初月終る秋の夜のまら
 重直
 泉山秋の子まにまきと光をまけて月を照らす
 實盈
 けさき名にふる泉の出のまよ新まきの初秋の夜の月
 方恒
 十年ゆふ山を泉の名にふるすけす此初秋の月
 元貞
 雨うらきて泉の名にふる山の端きよ初秋の月
 茂啓

思ひなき泉の出乃水やけさうぬまき初秋の月
 延秀
 侍他一秋もつこの山あふす秋や秋の目れやげさ
 貞賢
 あまのまよは何とらまよのしんじつにやけき月
 休心
 名よめり一秋に下つこの山を初月の秋のまよげさ
 一鳳
 初を初月終る泉の名にふる山を秋の月と言ふ
 浦野
 泉山終るや雲井まよすん秋り秋乃月のまよらに
 知政尼
 んけさき名にふる泉の出のまよ初秋の月
 利代女
 泉山終るまよのまよらやあまのまよ初秋の月
 梅女
 月終のまよのまよらにまよぬらんまよ初秋の月
 成長
 泉山終るまよのまよらにまよぬらんまよ初秋の月
 主税

泉山吹風をあらしむるはれはるるや秋の月 意貞

夜あけの秋の風もひてれつこの山は月乃をりさ 岩之

秋ハ初つこの山の比れ面をかきそとてとて月夜 自覺

熊谷晚鐘

林英

武夫脱劍謝成功此地空餘古梵宮
人事蕭條珠樹外鐘聲吹送夕陽風

熊谷晚鐘

法の水よは結をんたなうろ久之寺此鐘の夕鐘也 基祐

一村をまらちがえて熊谷此寺もひく入あひの鐘 好山

旅衣ゆき此油もゆり寺のこけりの都は入れのこ 悟心

蓮生ふけゆり寺此鐘の音にをを今やとらふはじ 重救

秋を燈籠も時向もゆり寺の夕鐘さひくひく鐘の音 常房

さらぬたよと向う定めぬ旅人のうたな敷きふ入れ乃ぬ 柳生

今もかをとひく城をふ鐘の音は夕鐘とある熊谷の里 鶴洲

利根帰帆

子紫

水岸垂楊滿江頭魚自肥羨看帆影色直逐晚

風_山歸_ル

同上

指月

岸頭物色四無山利水溶々千里間天畔一望
何処極風帆遠逐白雲還

同上

花睡

兩州相跨利根川千古長流風月鮮日暮江頭
烟雨後歸帆幾片白鷗前

利根川帰帆

暮のあす利根の川ながさの波海も遠く霧に隔く
忠用

頼邦	頼重	賢中	國琛	美種	信高	恒督	明雅	陳宜	忠房
船渡子今やしあもさの川やのちる帆影のえきききり	遠を此里もあめり夕暮よかちつこよれ川舟	夕暮れ波海不のまき帆引くちるち停まぬの川舟	とぬ川のちるの帆さるん舟とち帆さうけてゆゆあ人	暮のあすの川の夕風よ帆舟ゆきくちるあひと	暮のあすの川の夕風よあるあ人あふあしと	折れしそよれ川の舟を棹すつゆちゆゆあ人	吹さるあすの帆さるん舟とち帆さうけてゆゆあ人	そよ川の波の夕風あはるあ人あふあしと	風さるあすの川まき夕暮よあるあ人あふあしと

長川の秋風は生帆に吹く千本の波の音なき
 忠於
 崎の津はゆきさの道風まわりのくさきその北川子
 道運
 日暮れをふふ却るを帆はあけてゆきさき夜の舟
 良直
 夕附日生帆はうらそは遠き夜の川流はあきか
 松運

成田落雁

中臺

萬頃稲花秋色中成田薄暮下賓鴻誰家此日
 離群怨應有天涯書信通

成田落雁

重頼
 清玉
 房女
 伊和女
 隆重
 友淳
 棟明
 良直
 園田

あまの雲のたがし山とくささひきそ成田の物なるうらも
親阿
はやく成田の橋よりうらむ友あふおふ中なるきき
光淳

長井夜雨

貞幹

愁雲數里晚紛々此地蕭條義士墳空有感歌
催夜雨深憐意氣不如君

長井夜雨

つゆの原をささひき秋はむき井の里なるの夜すくら
忠用

吹きふ風より後の夜の雨を長井の里なるまきよ
頼那

名を有る長井の里の多岐軒の雨はい淋き
基房

多岐むきひ伝つ秋の夜の長井の里なるやう
直傳

たりしものれ長井の里は旅ぬく昔とあるはあ
茂登子

秋の夜の長井の里にゆき雨はむき志のふれおそさひき
白堂

更なるの長井の里はさびささと切り所とふ雨より
登良女

降りしものあき方とさひあき長井の里は秋のまきよ
玄道

あつけさ長井の里はささひなる窓井雨の春を雨にも
隆重

旅まき長井の里なるはゆきと志ふるは夜
光延

馴るは長井の里なるはゆきと志ふるは夜
道品

にゆきゆくありき井のありき
繁女

此のありき井のありき
正清

おほこのありき
重幸

夜夜ゆき井のありき
政命

修夜ゆき井のありき
村瀬

修夜ゆき井のありき
吉岡

修夜ゆき井のありき
松花

十二境

山堂秋夕

爽氣山堂暮秋夕
望夕陽棲鳥何処去
唯看白雲深

山堂秋夕のありき
由惇

野曲耕夫

霞洲

野徑蕭條艸色平
放牛歸去少人行
蓑衣滴盡

西疇晚一曲
農歌帶雨耕

治承の代のありき
隆封

岸頭甘菊

南山

桃花如錦晚霞低，獨步探春路轉迷。
彷彿人間歸不得，坐疑身入武陵溪。

吾の中此花と見えれば谷ぬき桃をさくら此をさくらと 指月

龜岡古松 越溪

老松百尺鬱龜岡，千載龍鱗飽歷霜。
自是長生君有術，未曾往昔授秦皇。

神さひて水よそきはの影さくら多代修めん龜岡の松 實勝

蓮池遊魚 昌成

團々荷興絕塵埃，幾許浮浪情自催。
新鑄香錢鯀水上，又擎翠蓋映池臺。

いさばよさ此の蓮のけりめてはやもや魚ありん 義雄

柳岸夜泊 黎丘

岸頭垂柳夜陰深，月照蓬窓歸思深。
明日客船何處去，長條繫得故園心。

日方れを夜をゆり川き此柳乃ある日あつて見る 時峯

虎溪紅葉 西涯

一徑秋光古寺閑
虎溪橋下水潺湲
滿林霜葉紅偏好
恰似淵明醉後顏

結句も虎字好。紅う子まをくはくはうもみちも 民子

龍淵瀑布

西園

絶壁千尋鎖紫烟
飛泉如咽自相連
看来豈啻銀河落
定識神龍躍在淵

天此川流の事やけいひまき名も新出又為るべきこと 盛和

此篇作者の才情をわくは詩歌の好悪と
探まはしむるに志をい捨ひ輯めたるまに
是と綴りゆりぬ

笠岩

うあまひまひるふと〜向まじ此浦波よりにほそて

大一人美鶴蔵人子大い名馬林十天下

龍淵瀑布

續景境集跋

天地之美觀，歸之山水。凡名觀游于天下者，咸出傳記地理之志。然受目睫之強，亦幾何。蓋聞武州崎玉郡，有絕特之稱，照岩蘭若，獨為第一。其地攢巒平蕪，大川林麓，無不各抱地勢而聚觀。於几席之間，往歲竺岩禪師擬其景，乞索題詠，以授梓人。今年補遺再刻，蓋夫非山水之鍾秀，不足以壞觀。又非竺師之勤，不能以傳其名。覽者將必有感焉。傳曰：智者樂水，仁者樂山。君子其舍諸。



吐月庵

元文五庚申歲霜月

本町三丁目

東都

書林

西村源六梓

京都

書林

堀川錦小路上町
西村市郎右衛門

今卷

本海